

第 4 編 実現化方策

第1章 都市計画マスタープラン実現化の基本的な考え方

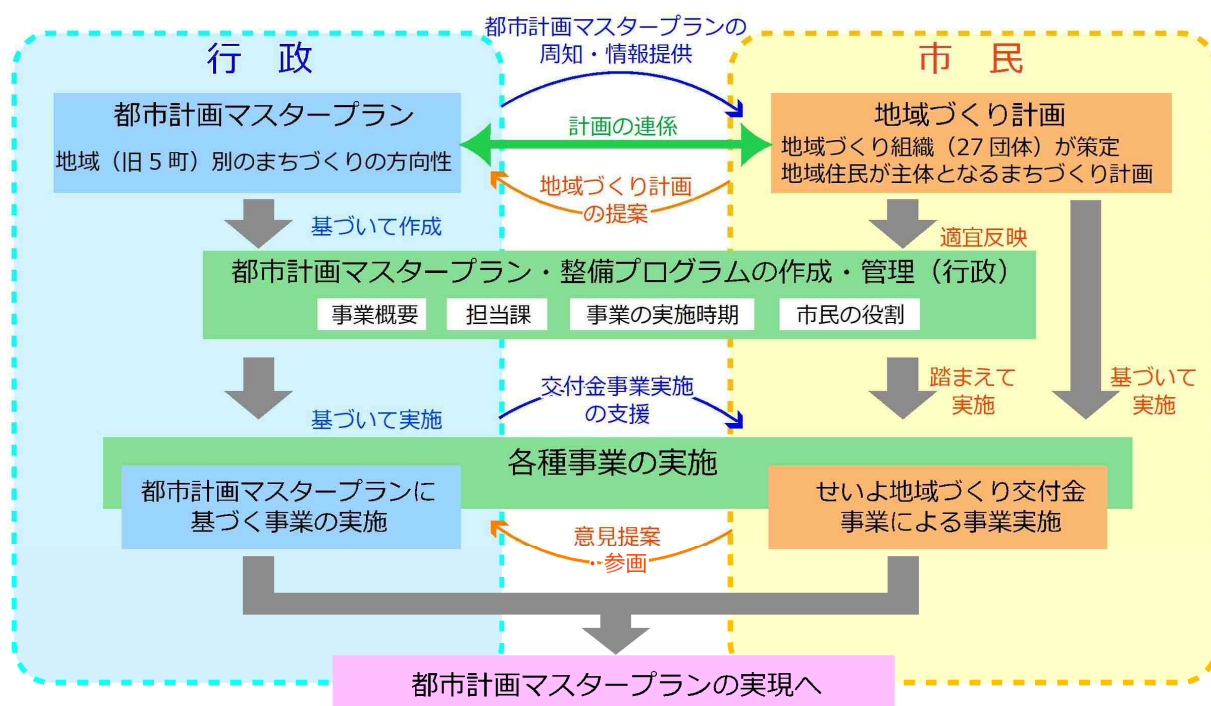
本計画に掲げた将来像である「豊かな風土を育むまち ～いつもずっと ちょうどいい 西予の暮らし～」の実現に向けて、社会情勢の変化や市民の価値観の多様化等に柔軟に対応しながら、超少子高齢型・人口減少社会における持続可能なまちづくりを進めていきます。

本計画では、持続可能なまちづくりを進めるため、「西予市立地適正化計画」と連携した中心市街地の求心力の向上に向けた施策を位置づけています。また、都市計画区域外も含めた既存集落の維持に向けて、旧小学校区を基本とした「小さな拠点」の形成を図ることとしています。

人口減少が進行していく状況では、既存集落の維持を図ることはとても難しい課題です。このような背景の中で、本市では、旧小学校区を基本とした市民が主体となる「地域づくり組織」を既に設置しており、それぞれの地域で個性ある独自のまちづくり・地域づくりが展開されています。

これらの地域住民が主体となるまちづくりを効果的に進めるため、本計画の内容を行政と市民関係者が共有し、地域づくり組織が主体となって「地域づくり計画（地域が主体となるまちづくり計画）」を立案し、実際に各種の取組を支援していきます。

また、都市計画マスタープランで位置づけている各種施策・事業を「整備プログラム」として整理し、これをもとに各種事業を推進します。



■まちづくりの推進イメージ

第2章 実現化方策

(1) 制度活用による計画推進

①関連する分野別計画の一体的な推進

本計画に関連する分野別の各種マスタープラン・各種計画についても、まちの空間として一体となって相乗効果を発揮するよう、連携しながら取組を進めます。

立地適正化計画や地域公共交通網形成計画、住宅マスタープラン、景観計画等の策定や見直しにあたっては、本計画の方向性と整合を図ります。

②関係法令の運用

本計画に示した将来像を実現するため、都市計画法をはじめとする関係法令に基づく制度を、地域の実情に合わせて、地域の意見を尊重しながら適切に運用していきます。

また、地域住民主体のまちづくりを進めるに当たって、都市計画法に基づく都市計画提案制度を活用できるよう、助言や支援を行います。

③各種事業手法の活用による財源確保

事業実施の財源を確保するため、国や県における補助事業など、各種補助制度の動向を把握し、適切な活用に努めます。また、施設整備にあたっては、民間活力の導入等を検討し、整備を行います。

さらに、現在市が実施している「せいよ地域づくり交付金事業」が本計画の方向性に沿って地域住民に活発に活用されるよう、地域づくり組織に働きかけていきます。

(2) 協働による計画推進

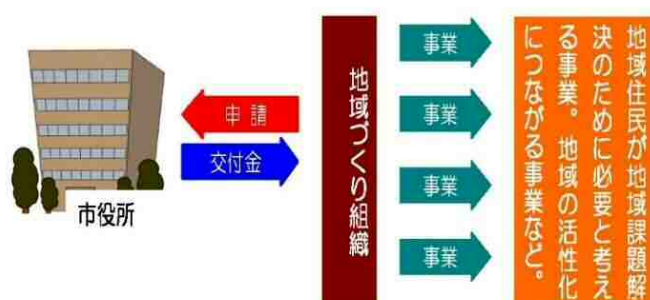
持続可能なまちづくりを進めるにあたっては、市民、事業者（NPO）・大学、行政等の多様な主体が協働することで、“現在のまち”を、“誰もが『こうありたい』と望むまち”に近づけることができます。

そのためには、行政はもとより市民や事業者が、自らの行動がまち全体に及ぼす影響を常に意識することが大切です。そして、お互いがパートナーであると考えて尊重し合い、それぞれの立場や専門性を活かして協働することで、まちをより望ましい方向へ変えていくことができます。

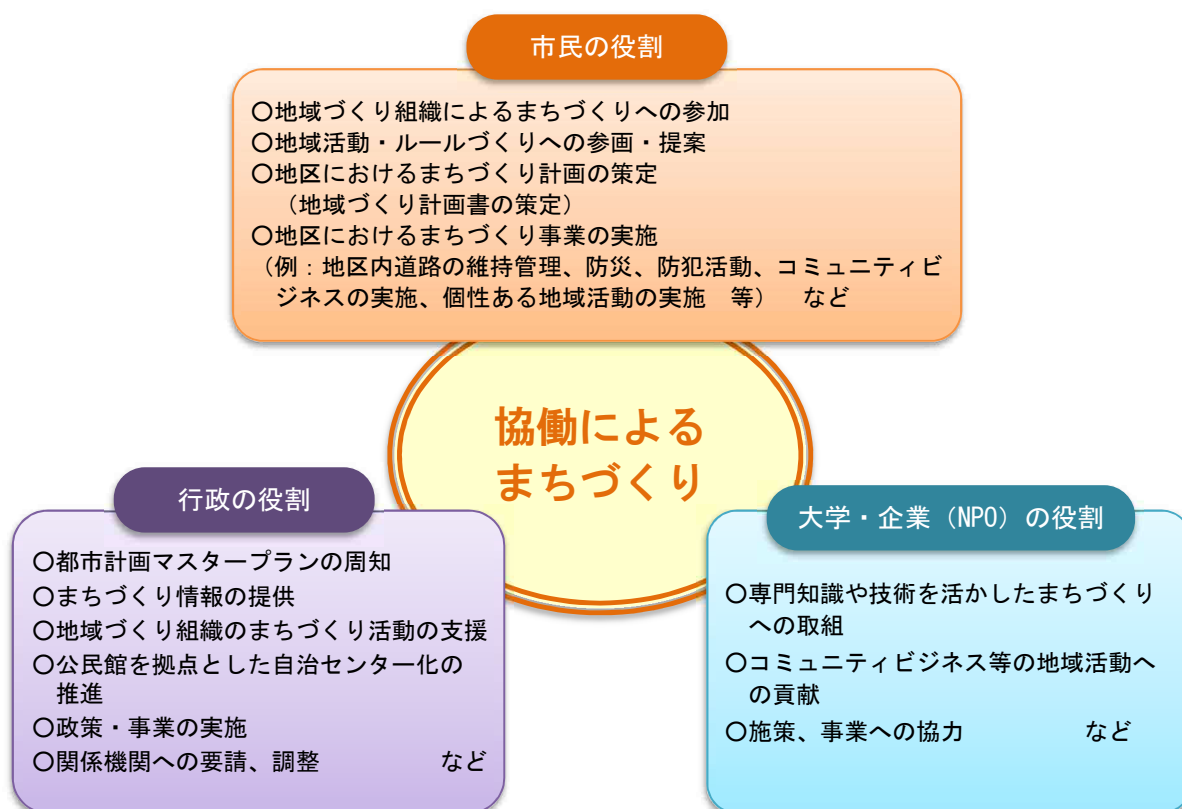
こうしたまちづくりにおいて、特に市民は、地区レベルの様々な問題や福祉・地域交通などの生活に身近な問題を解決するために、主体的にきめ細かいまちづくりを担っていく必要があります。そのためには、みんなでより良いまちの姿について考え、それを実現するために必要な活動を積極的に展開していくことが重要です。

本市では、市民主体のまちづくりを行政が支援するため、「せいよ地域づくり交付金事業」を実施しており、現在、旧小学校区を基本単位とした 27 の「地域づくり組織」が設置され、それぞれの地域で事業が実施されています。

今後も、市民が当事業を積極的に活用するように努め、市民が主体となったまちづくりを支援していきます。



■せいよ地域づくり交付金事業の仕組み



■協働によるまちづくりにおける各主体の主な役割

(3) 計画の適切な進捗管理

①整備プログラムの活用

本計画の実現に向けて、全体構想や地域別構想で位置づけた施策・事業を「整備プログラム」として整理し、各種事業を推進します。

整備プログラムは、短期（概ね5年）、中期（概ね10年）、長期（10年以降）に区分し、定期的に事業の進捗をチェックしていきます。

西予市都市計画マスタープラン（H30年3月策定） 整備プログラム

第1 宇和地域

No	都市計画マスタープラン		施策・事業	役割分担		実施時期		
	地域別構想の 施策体系	部門別・地域づくりの方針		担当課	市民の 役割	短期	中期	長期
1.土地利用								
1	(1)生活サービス 機能ゾーンの整備 方針	①中心拠点周辺の整備 ・JR卯之町駅及び市役所本庁舎周辺は、宇和地域の 拠点のみならず、市全体の中心拠点として、求心 力の高い拠点の形成を図ります。 ・拠点の求心力を高めるため、「卯之町」はちのじ」ま ちづくり整備事業」を推進するとともに、既存の生活 サービス施設の維持・更新、ショッピングセンター等 新たな商業施設等の誘導に努めます。	卯之町「はちのじ」まちづくり整備事業 ・駅舎改築 ・複合施設新築（郵便局・観光交流センター・事務所等） ・駐車場整備（立体駐車場・駅前駐車場） ・駅前広場整備 ・無電柱化（市道旧町地区326線） ・卯之町駅自由通路 ・駐輪場 ・情報板	政策推進課	・事業の参加・協力			
			空き店舗活用事業 ・西予市新規出店者店舗改修補助事業 ・西予市店舗リニューアル補助事業	経済振興課	・制度・事業の活用 ・空き店舗等の情報 提供			
			・市道旧町地区212号線（支障設備移転工事） ・図書館棟解体 ・第二別館一部改築（農業指導班、ハローワーク仮転用）	財政課	・事業の参加・協力			
			都市再生整備計画事業 ・市道旧町地区212号線 ・都市機能誘導区域の指定による、都市機能施設の誘導	建設課 建設課	・事業の参加・協力 -	 		
			・旧宇和病院跡地は、JR卯之町駅や市役所本庁舎 に近いという利便性を活かし、市民と協働しながら、 図書館と地域交流センターとの複合施設、福祉施 設、子育て支援施設等の整備を進めます。	子育て支援課	・事業の参加・協力			
2			都市再生整備計画事業 ・複合施設新築（図書館・地域交流センター） ・市道旧町地区187号線他5路線整備事業 ・広場 ・駐車場	建設課	・事業の参加・協力			
3			・中心拠点を核とした持続的なまちづくりに向けて、 市民、商業事業者等と行政が協働したエリアマネジ メントの導入に取り組みます。	卯之町駅前周辺エリア「はちのじエリア」の「資源」を一体的に捉え、 市外・県外・国外からの観光促進、定住促進やコミュニティ促進、 地域の方々にとっての利便性の向上、さらには未来の環境面等も 視野に入れながら、エリアマネジメントの視座を持った新たなまち づくりの実施	政策推進課 建設課	・事業の参加・協力 ・エリアマネジメント活 動への参加		

■整備プログラムの例

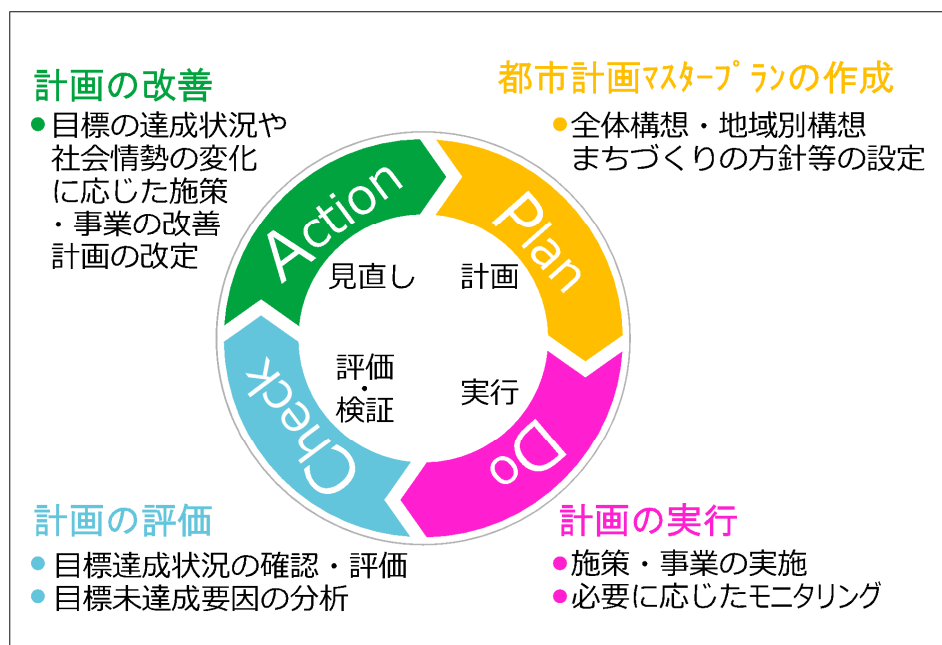
②関係各課との定期的な調整

本計画を推進するためには、様々な分野の多岐にわたる施策を実施する必要があります。そのためには、関係各課との意識の共有が不可欠です。

関係各課との定期的な調整・意思疎通に努め、本計画に基づく施策の実施状況を定期的に確認し、庁内で横断的な連携体制を構築しながら各種事業を推進します。

③PDCA サイクルの構築

本計画の進捗を適切に管理するため、PDCAサイクルを構築し、関係機関や市民などと協力して、定期的に施策・事業の進捗状況を確認します。その結果、改善が必要な施策については、対策を検討し、施策の方向を修正します。



■PDCAサイクルのイメージ

第3章 これからの地域づくりに向けて（市民の役割）

超少子高齢型・人口減少社会において、持続可能なまちづくりを進めていくには、行政だけに頼らないで、市民がそれぞれの地域の風土をいかし、主体となってまちづくりを進めていくことが重要です。

西予市では、地域それぞれが豊かな風土を持ち、これらを育みながらまちづくりを進めていくため、市民が主体となるこれからの地域づくりの考え方を以下に示します。

これからの地域づくりの考え方（市民の役割）

- (1)常によりよい社会を志す（プランニングを継続する）
- (2)市民実践型のアプローチを行う
- (3)学習社会の創造
- (4)風土を生かしたまちづくりの実践

(1) 常によりよい社会を志す（プランニングを継続する）

今後、都市計画マスタープランで示したまちの将来像を目指す中で、自然・社会状況の変化に対応していくためには、市民の誰もが常に西予市のまちがどうすれば良くなるということを思い続ける（プランニング）ことが重要になります。

このため、市全体や地域でよりよいまちとするための議論や、勉強会などを積極的に行っていく必要があります。

(2) 市民実践型のアプローチを行う

まちづくりがうまくいかず、地域が衰退する悪循環に陥っているまちが全国で多く見られます。このような地域衰退の罠からどう抜け出せるかが、地域に問われている課題といえます。

こういった地域衰退の悪循環の傾向は、これまでのまちづくりが“行政主導によるアプローチ”のみに頼ってきたことが一つの要因といえます。今後は、“行政主導によるアプローチ”だけではなく、“市民実践型のアプローチ”を進めていく必要があります。これは、市全体といった大きなスケールではなく、自分たちが住んでいるエリア、それぞれの場所で、“市民活動”や“業（なりわい）”を起こし、それぞれが独自のアイデアや創意工夫でまちづくり活動を展開していくアプローチと言えます。

一方で、行政がリーダーシップとり、公平性を原則とした“行政主導型のアプローチ”を進めていくことも重要です。

このため、ソフト施策等が中心となる“市民実践型のアプローチ”から、行政主導型のハード整備につなげていけるような取組の流れを作っていくことが重要です。

地域づくりの**新たな**方向性

行政主導型アプローチ



ハード整備

(計画・設計・施工)

ソフト事業

(使う・活動・イベント)



市民実践型アプローチ

資料:「西予みらい構想シンポジウム これからの地域づくりの考え方～西予市都市計画マスタープランの試み～愛媛大学 羽鳥剛史」基調講演資料より

(3) 学習社会の創造

“市民実践型のアプローチ”を促進させるためには、身近なところから、できるところから地域の魅力創出、課題解決に役立つことを実践し、その実践成果を検証し、うまくいけば地域の中で普及させていくことが重要です。

そのためには、身近な小さな実践（市民活動や起業など）を起こし、それを検証し、地域に波及させることができる学習社会を構築することが必要です。

せいの地域づくり交付金事業等を活用し、身近な小さな実践を実施し、これら活動を通して、市民同士がコミュニケーションしながらお互いを認め合う文化を創造していくことが必要です。

(4) 風土を生かしたまちづくりの実践

本計画では、「豊かな風土を育むまち」を将来像にかかげ、5つの地域それぞれに豊かな風土を持ち、それぞれが個性を活かしたまちづくりを進めていくことを目指しています。

西予市では、四国西予ジオパーク等、豊かな自然資源を活かしたまちづくりを進めています。これら豊かな自然資源は、西予市の豊かな風土であり、他にはない価値を持っています。

“市民実践型アプローチ”のまちづくりにおいても、これら西予市の風土を活かし、新たな価値を生み出すことが必要です。



資料：四国西予ジオパークホームページ

四国西予ジオパークでは、地形や地質、そこで共生する人々の暮らしといった西予市が持つ「地域性」を有し、大地の特徴を活かしたストーリー性やオリジナリティ、市場性、安全性など高い基準をクリアした逸品を「四国西予ジオの至宝」として認定しています。これらの取組を活用しながらまちづくりを行うことが重要です。



本計画の策定において、市民に対して、都市計画マスタープランの理解を深めてもらうことや、これからの地域づくり考え方について考えてもらうことを目的に、シンポジウムを開催しました。

■シンポジウム開催のチラシ

■パネルディスカッションの概要

コーディネーター及びパネリストにより、『西予市のまちづくりの方向性について』討議していただきました。

【意見交換】

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・今から 16 時ごろまで『西予市のまちづくりの方向性について』討議していきたいと思います。
- ・まずは、まちづくりの方向性ということで、西予市にお住まいの二宮祥子さんと山口さんにお話しをお聞きしてもよろしいでしょうか。



(二宮祥子氏 のびのびプラタナスの会 代表)

- ・狩江地区で子育て支援の活動をしています。狩江は団結力があり、近所の繋がりがあるのが強みです。活動を継続していくためにも、多様な世代の人を増やしていきたいと考えています。
- ・地域活性化が進んでいるように見える一方で、少しずつ課題も出てきています。現在、様々な勉強やチャレンジをしている中で、自分たちの持っている良いものを飛躍させて、一つの大きなイベントに集約させるようなことに取り組んでいます。



(山口聡子氏 田舎で働き隊)

- ・野村の魅力はイケイケで、ずっとやり続ける推進力があります。
- ・いま「こういうことがしたい」となれば、すぐに連絡を取り合い、行動に移します。行政の人が支えてくれていて、役割分担がしっかりしています。いろんな年代の人の交流があり、30代・40代の人たちと楽しくコミュニケーションがとれていて、ラインのグループもたくさんあります。
- ・あとは飲み会が多いです。イベントごとに飲み会を開くので、たくさんあります。



(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・お二人とも、人と人との繋がりである団結力など、その中での役割分担がすでにある程度整っているということを、強みとして挙げて頂きました。
- ・「リレイション」ですが、ただ、地区によってはまだまだ関係が出来上がっていないエリアもあると思います。そういったところへの示唆を頂きたいのと、あと狩江地区の二宮祥子さんのお話しの中で、「自分たちの持っている良いものを飛躍させて、一

つの大きなイベントに集約させるようなことを取り組んでいる」とありましたが、そのことに関連して、是非、井上さんと二宮敏さんにそういったデザインの力のところでお話しを伺えたらと思います。

- ・まずは祁答院さんお願いします。

(祁答院弘智氏 株式会社リレイション 代表取締役)

- ・徳島県神山市や北海道浦幌町など、住んでいない場所での繋がりを作っています。そのためには役割分担が必要であり、自分の役割が何なのかを考えています。その地域を観察して、出来そうなことを考えます。
- ・人の人生観によって、捉え方は変わってきます。起こる出来事が同じでも、捉え方は無限大にあります。要するに、目的は一つですが手段は無限大にあるなと思います。私たちの関係性の中でも、結果を急ぐわけでも問題を解決するわけでもなくて、未来志向のテーマを探していく、ポジティブな発想で取り組んでいます。



(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・一点質問ですが、地域住民との関係性をつくる時には、祁答院さんの立場は外から来た人と捉えられているのか、それとも地元住民になるのでしょうか。

(祁答院弘智氏 株式会社リレイション 代表取締役)

- ・地域との関係性は、両方の立場を持っていると思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・今日のパネラーである二宮祥子さんの明浜地区と山口聡子さんの野村地区は上手くいっているということですが、お聞きしたのは、地域づくり組織にヒアリングしてみると、少し停滞気味の地区では、今まで自治会でやっていたことを無理にまとめられて、あまり前に進めないということもあるようですね。
- ・そういった地区で、地域づくりの関係や今おっしゃって頂いたテーマを見つけるためのリレイションとは、何か秘訣があるのですか。

(祁答院弘智氏 株式会社リレイション 代表取締役)

- ・物事を始めるときには、終わりをイメージして行動するようにしています。今の局面が上手くいっていないのであれば、未来を語る前に、破壊するという行為（考え方）をします。本来壊したあとに作らないといけませんが、ほとんどの過疎地域では、滅びているのを横目に見ながら、基礎が揺らごうとしている上に無理やり新しいものを作ろうとしています。主体的に自分たちの意志で壊して新しいものを作る、創造するスタンスをとることが重要だと思います。
- ・多くの地域では、「これまでがこれからを決める」という考え方で取り組んでいまし

たが、そうではなく、「これからがこれまでを決める」というスタンスで取り組んでいます。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・テーマとも関わりますが、持っているものをどのように活用するのか、デザインに活かしていくのか、その辺りについて、お願い致します。

(井上真季氏 イノウエデザイン事務所 代表)

- ・明浜地区は、人との関わりが良い意味で特殊だと思います。人を受け入れる体制があり、沖縄っぽい感覚があります。



(二宮祥子氏 のびのびプラタナスの会 代表)

- ・秋祭りの時には、どの家にも自由に出入りができて、みんなで接待しています。一日に 200 人を接待することもあります。

(井上真季氏 イノウエデザイン事務所 代表)

- ・私もお祭りに行きましたが、どの家に誰でも行っていました。包容力のある町だなと思いました。沖縄のように、人が来てもらえるようなデザインを考えたいと思います。
- ・一方で、夜の宿泊施設の問題があるので、もう少し柔軟になれば良いなと思います。

(二宮敏氏 株式会社 NINO 代表取締役)

- ・明浜地区も野村地区もですが、先ほど羽鳥先生の基調講演の中で、野村地区だと「地域の活動に 1 年間で 30 本参加する」とありましたが、月に 3 本も行うモチベーションは何だろうということがお聞きしたいです。
- ・また、同じく先ほどの羽鳥先生の基調講演の中で、「川の流れの中にいる船がその位置をキープすることは大変である」ということだったのですが、今の生活をキープするのは大変なことだと思います。新しい人に住んでもらうためにはどうすればいいのか、次の世代はどう考えているのかについて、お聞きしたいです。



(山口聡子氏 田舎で働き隊)

- ・野村地区でいうと、積極的に活動している人は限られています。60 代と 30 代の世代の人たちが頑張っていて、まちの元気をキープするにはどうすればいいか、今考えています。一方で、一般の人にとってはイベントがあるのが当たり前で、誰かがやってくれていると思っている人が多いのではないかと思います。下の世代が、自然にまちづくりに関わってもらえるような取組を考えています。

(二宮祥子氏 のびのびプラタナスの会 代表)

- ・狩江地区でも、50代～70代の人が活発に活動して、その下の30代がついていっています。
- ・また私が一番問題だと思うことは、協力はしているけれども自発的に発信する人が少ないことだと思います。仕事しながらなど、“ながら”で活動できるような仕組みがあれば、子育て世代や若い世代も活躍できるのではないかと思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・外から見ているとまちづくりは重いだけだが、その裏には地域で培ってきている関係があり、あるいは役割分担があって、活動に至っていることが改めて分かりました。
- ・一方で、若い人をどう取り入れるのかなどの、課題も抱えてらっしゃるということですね。
- ・今度は、才能を持った若いお三方にお聞きしますが、西予市外といろいろお付き合いがあると思いますが、どのようにすれば西予市に関わりやすくなるのか、どう受け入れていける余地があるのかなど、その辺りについていかがでしょうか。

(二宮敏氏 株式会社NINO 代表取締役)

- ・西予市出身で、魂は西予にあります。地域のブランディングでは、その場所にあるものをどのように感じよく表現できるかが必要になってくると思います。風土を日常で表現している人を、どうやってデザインできるかを考えています。
- ・技術によって美しく演出することは出来ませんが、今の時代、それだけでは通用しません。みんなが共有できるアウトプットが必要だと思います。

(井上真季氏 イノウエデザイン事務所 代表)

- ・無駄な看板などは必要なく、本当に必要なものをディスカッションできる取り組み方をしたいと思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・都市計画マスタープランのキャッチフレーズも井上さんがデザインして下さり、確かにみんなが共感できるものだと思います。
- ・私は、よく地域の“ものさし”と言っていますが、新しい価値をつくるのではなく、埋もれている価値を発掘することが必要で、その取組が出来る人に活躍してもらいたいと思います。

(祁答院弘智氏 株式会社レイション 代表取締役)

- ・地域の“ものさし”という話がありましたが、15歳までに自分のものさしで活動できる人材の育成・教育が必要だと思います。自分のものさしを大事にすることで、地域のものさしに繋がっていくと思います。また、次の世代にノウハウを受け継いでいくことが必要だと思います。

- ・これまで、「地域を悪くしよう」と思って計画を立てられてきたのであれば、思惑通りだった、と言えますが、「良くしよう」と思って計画を立ててきたのであれば、その方法が間違っていたのだと思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・“ものさし”、いわゆる“価値観”を自分の中で見出すことは難しい作業であり、ただ10代後半から20代に対して、是非、そういった機会を西予市の中で設けて欲しいと思います。
- ・まちづくりの“学び”とは何なのか、ずっと考えていました。“学び”とは“真似び”であり、もっと現場に身を置いて、実際にまちづくりを真似ることが大事だと思います。そうしなければものさは変わらないと思います。世代を通じた学びのチャンネルを持つ必要があります。
- ・他に言っておきたいことがある人はいますか。

(二宮敏氏 株式会社NINO 代表取締役)

- ・海外でも仕事をさせてもらっており、よくグローバルと言われていますが、海外でやっていることは、西予市でしていることと変わらないです。海外の人たちは自分たちの生活を発信しているだけなので、西予市も情報を発信していけばグローバルになれると思います。他の都市と比べても西予市は資源が豊富だと思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・私は“ほんまもん”が大事だと思っており、本物を磨き上げればグローバルに通用すると思います。

(山口聡子氏 田舎で働き隊)

- ・自分のやっていることが、まちのためになっているのか考えています。まちのためにできることを一歩でも歩んでいきたいと考えているので、様々な人と関係を持っていきたいと思います。

(二宮祥子氏 のびのびプラタナスの会 代表)

- ・私は子育てをしようとした時に小学校がなくなりました。このことが、地域活動のモチベーションになりました。
- ・いま、子供たちと地域とのふれあいが無いのが問題だと思います。地域に育てられたと思ってもらえるようなまちづくりが必要だと思います。

(井上真季氏 イノウエデザイン事務所 代表)

- ・私は西予市が好きです。美味しいレストランやパン屋さんがあり、散歩すると自然が残っています。歩いて行ける中に小さなコミュニティがあり、西予市のみで本州の気候を全て感じることはできるのは凄いことだと思います。

- ・これらの資源をいかに発信していくかが重要だと思います。私は子供の頃、まちが美しくないのが嫌だったので、子供たちの事を考えたまちづくりも必要だと思います。

(羽鳥剛史氏 愛媛大学 准教授)

- ・様々な意見が出ましたが、地域づくり組織の関係性を再度考え、子供たちに向けたまちづくりで、外の人に関わってもらう必要があります。
- ・市長に来て頂いていますので、最後に一言頂ければと思います。

(西予市 管家市長)

- ・人口が減っている中、市内では年間 200 人程度しか子供が生まれていません。3つの県立高校を合わせても、500 から 600 人程度の生徒しかいません。ふるさと思ふ、体験できる子供たちが少ないのは残念です。
- ・地域の活性化に向けて頑張っている人の力を借りながら、まちづくりの中に行政も入っていきたいと思います。今後もまちづくりにご協力頂ければと思います。

